

3. 市場論とアジア経済の重層性

原 洋 之 介*

キーワード: 経済学、市場論、ネットワーク、西アジア、東南アジア、重層性

Key Words: economics, market theory, network, West Asia, Southeast Asia, multilayeredness

- | | |
|--------------------|----------------------------------|
| 1. はじめに | 4. 転：ネットワークとしての市場論から
見たアジア経済史 |
| 2. 起：経済学と地域研究 | 5. 結：アジア経済の重層性 |
| 3. 承：ネットワークとしての市場論 | [付録 質疑応答のまとめ] |

1. はじめに

私は専門が東南アジアの経済で、西アジアは一度サウジアラビアに旅行したことがある程度で専門外だが、最近少し色々なことを考えているので、それを起承転結風に報告したい。

2. 起：経済学と地域研究

まず「起」であるが、私の専門である経済学は、地域研究と肌が合わないという話である。

現在（1997年当時）京都大学東南アジア研究センターで、ある大きな科研費が動いており、「総合的地域研究の手法の確立を求めて」と題されている。私もそれにインボルブさせられているが、その前段として、東南アジア研究センターは『講座現代の地域研究』という4巻本を出した。これが前提になって現在の重点領域研究が進んでいるが、その第1巻『地域研究の手法』の中で、東南アジア研究センター所長（当時）で、マレーの農村の社会学・人口学を研究している坪内良博氏がある論文を書いている。「専門分野と地域研究」というタイトルであるが、この中に私にとっては非常に乱暴だと感じられることが書かれている。今、われわれの依って立つ、普通ディシプリンと言われているものには、地域研究への親近性を内在しているディシプリンと、地域研

* 東京大学東洋文化研究所（現東京大学大学院情報学環）

究への疎遠性を内在するディシプリンがあり、疎遠なほうの代表が経済学だというのである。

少し引用すると、「社会科学の中で最も鋭い分析方法と分析視角を発達させてきたのは経済学である。特に近代経済学は経済活動に関するモデル構築に成功し、人間の経済行動を、方程式を通して理解することに道を開いた。人間の諸活動の中から経済活動だけを抜き出し、経済的合理性に基づく行動と市場原理とを前提に理論的構築と現実分析を行う、とするのである。経済学は人間の行動に経済行動以外の側面が存在することを決して忘れはしないし、可能ならばそれを理論枠組の中に取り入れようとするが、これらは変数としては結局残余のカテゴリーとして扱われることが多い。このような普遍主義的な志向が顕著なため、経済学的な手法は時には地域を扱いながらも、それを素材と見なすにとどまり、結局は地域自体の理解から遊離する可能性を含んでいる。」[坪内 1993: 55-56]

坪内氏はこのような文章を書かれ、地域研究と経済学というのは要するに一番仲が悪いもの、と述べられている。引用中に出てくるが、経済学者の普遍志向という言葉は、別名「経済学帝国主義」という。社会科学の中で唯一ノーベル賞があるのが経済学だが、そのノーベル経済学賞の受賞者を見ると、たとえば、非常に有名なシカゴ大学の経済学者で、自殺に関してもコストとベネフィットの計算ができると述べた、ゲーリー・ベッカーがいる。また、人間は一生自分の生きている先のことは何でも合理的に予想ができるという理論を使って、(我々はこれを反ケインズと呼んでいるのだが、) 政府は何をやってもうまくいかない、ケインズ的な財政金融政策は無効だと証明したロバート・ルーカスもいる。

余談だが、この有名な経済学者はノーベル賞を受賞する前に離婚しており、「もしノーベル賞をもらったら、慰謝料にそのうちの半分をやる」という、合理的期待形成をやって、奥さんに半分取られたという記事が『エコノミスト』に掲載された。すべて経済学でやってしまえというのが「経済学帝国主義」なわけである。

まじめな経済学者であればあるほど、こういう普遍主義、経済学帝国主義に近い感覚を持っているので、ますます地域研究と仲が悪くなる傾向がある。逆に、あまりまじめでない経済学者で、アジアのことを好きで研究し、なんとなく経済学をやっているような場合、経済学者の学会である「エコノ派」の中でアンタタッチャブルのコーストに追い込まれており、全然出世ができない。あいつらアホやで、経済学もできんからアジアのことをやっているのだと、こういう雰囲気は今でも非常に強い。うそだと思ふなら、日本国中の経済学部と称するところの教官リストを見ていただきたい。ア

ジアを研究している人の比率は非常に小さい。だから、経済学は地域研究と肌が合わないという坪内氏の意見に私はある面では賛成である。しかし、坪内氏よりは少しまじめに経済学を勉強しているので、そう言ってもらっても困るというのが次の「承」である。

3. 承：ネットワークとしての市場論

「経済学者の市場論はひとつではない」とは、坪内氏も念頭に置いておられることで、経済学帝国主義的なことを言っている経済学というのはアメリカの経済学である。アメリカ以外の経済学は実は違うということを「承」で述べてみたい。ここで、経済学の講義をする気はまったくないが、私の考えていることを語るためにどうしても必要なステップなので、少しおつきあいいただきたい。

大きく経済活動を組織する仕組みとしてマーケットを考え、これを市場と呼ぼう。この市場を非常に精巧な機械のようなもの、あるいはメカニズムのようなものと考ええる見方がある。メカニズムという言葉自体は機械とほぼ同義語だから、「メカニズムあるいは機械としての市場論」と言えるだろう。

実はマルクスがこの典型例である。マルクスの『資本論』に出てくる価値法則というのはこのことを議論している。近代経済学をつくりあげた、フランスのローザンヌ学派と呼ばれるレオン・ワルラスの均衡模型も、まったくマルクスとは関係がないように見えるが、完全なメカニズムあるいは機械としての市場論を展開している。

それからもう一人、ここでランゲを挙げよう。ポーランドの経済学者で、社会主義でも市場経済は可能だと主張して、有名なフォーン・ハイエクと大論争をした人物である。このランゲがコンピューターと市場とは同じものであるという論文を書いている。コンピューターは機械であるから、市場は機械である、だから放っておいていいんだと。これをつくりあげれば、どんな地域でもどんな国でも経済は良くなる。こういうビジョンで出てくるアイデア、これを「ネオ・クラシカル」「新古典学派」と呼ぶ。

ところが、別のタイプの経済学の系譜がある。市場とはさらに柔軟なもので、自動仕掛けの精巧な機械ではない。市場とは、限定合理性といって、生きている間のことを全部予想できるというような完全な能力を持った人間ではなく、認識能力に普通に欠如があって明日のことはよくわからない、そういう普通の人間が経済取引あるいは交換を目的にし他者との結びつきをつくっていくネットワークのようなものであるというのである。

こういう議論はアルフレッド・マーシャルがすでに展開していた。彼は通常、新古典派の経済学の完成者と言われるが、私は逆だと思っている。それからジョン・リチャード・ヒックスというイギリスの有名な経済学者もいる。アメリカでのちに数理経済学として非常に体系化されていくのが機械論のほうの市場論であるが、イギリスではそれとは異なる、非常に経験主義的な市場経済論があり、それがネットワークとしての市場論である。

個々人が他者との結びつき、経済交換を通じて結びつきをつくり、その結びつきのつくり方も、信用できる仲間との結びつきと相手が騙すような非仲間との間では、そのネットワークのありようが違ってくるはずだということを非常に強く意識した市場論である。

これは経済学としては完成されていない。経済学部に入學し、大学院ぐらに行くと、だいたい大学院生の勉強時間の95パーセントは数学の勉強である。数学ができないと今の経済学の理論はほとんど読めない。私たちの世代だと、だいたい微分方程式までで終わっているが、最近の大学院生たちの数学は完全な位相数学である。そういったものをやらないと現代の経済理論は読めないようになっており、機械としての市場論の完成というようなことのための論文を読み、書いていくわけである。従って、後者のように、ぼやっとして、なにかよくわからない文学的な市場論は嫌われる傾向にある。そういう経済学者としてのトレーニングの過程が、いつのまにか経済学帝国主義になり、経済学という学問が地域研究という訳のわからないこととは疎遠になっている理由である。

しかし、ヒックスたちのいうネットワークとしての市場を考えると、少し違う形が見えてくるのではないだろうか。

残念ながら、最近日本の経済学会は一人の重要な人物を失った。以前駒場で教授をされ、私も随分強く影響を受けた村上泰亮氏である。氏の没後に出版された『反古典の政治経済学要綱』の中で、ネットワークとしての市場論をやらないとこれからの経済学自体がたち行かないということを非常に強く主張されている。従って、経済学者も全部が地域研究と疎遠なわけではないということだけはつけ加えておく。

これらを前提にし、経済発展をどう捉えるかということであるが、ここ20～30年間の経済発展、これは現代まで含めて「経済史」と読み換えてもいいだろう。それを私は東南アジアを中心にして考えている。東南アジアの経済発展といっても、一次資料が読めず、さまざまな二次資料を読みながら、だいたい14世紀から現代までというような射程でものを考えている。

東京大学東洋文化研究所には助手時代以来ずっといるので、専門の違い、地域の違う様々な同僚の先生方とつきあうことができた。「アッパース朝」を知らず、何年に成立したかなど、辞書をひいて覚えたものである。ブローデルを読むと「早咲きの資本主義」という言葉が出てくるが、インドでなぜカーストができたかについてはヴェーダの時代を研究している同僚もいれば、中国の宋代の研究などをやられてきた先生方もおられ、そうしたことも踏まえ、少し広めにアジアの経済史の流れをつかまえる見方をネットワークとしての市場論から考えてみたいと思うのである。

3. 転：ネットワークとしての市場論から見たアジア経済史

その素描は以下のようなものである。資本主義とは何かについて、ブローデルの定義は、基本的に利他的ではない目的、つまり利潤獲得の目的で行われる資本投入という絶えざる賭けというものである。利潤の獲得を通して常に漸進的に自己拡大してこうとする大商人が、自らの責任と工夫とで作りあげていく経済活動の束のようなものを、彼は資本主義と言っている。この資本主義とは、決して自らが作り出したものではない、生態・資源のありよう、あるいは社会の違いといった点に見られる地域の個性を、資本主義がそれだけを求めるスカラー量としての利潤に還元する、終わりを知らない経済活動であると言っていい。多様な地域間で成立している異なる価値体系の差異を利用・搾取することから利潤を得ようとする商業資本主義こそ、まさに資本主義のプロト・タイプなのである。これは、岩井克人氏の『ヴェニス商人の資本論』[岩井 1985] という名著中の名著からの引用である。

海域という交易路を巧みに利用した東南アジア地域だけでなく、中国とインドでも、また資本主義的商人は前近代といわれる長い時代にすでにこういうネットワークを形成していた。こういう力を持ったものを資本主義のネットワークと考える。

そして、資本主義という経済活動は、形式的には誰もが自由に私的利益追求という動機で経済取引を組織化することを基本としている以上、ある種の普遍的な力を持っている。その活動がまさに普遍的であるがゆえに、前近代の時代から現代まで広域的な経済取引のネットワークを形成する強い力を持っていたのである。

発展の地域性については、ブローデル自身は、『物質文明・経済・資本主義』[Braudel 1979] 第3巻の最後の「世界時間」と訳される最終パラグラフで、「個性を持った地域の基底までが資本主義のつくり出すネットワークに浸透されてしまうことはない」といっている。

ここでジョン・ヒックスが『経済史の理論』[Sir Hicks 1973] で述べたことを少し説明しておこう。組織の一形態としての市場は商人あるいは金融業者がつくったものである。だから、商品取引のネットワークやそれに関連する信用取引のネットワークは、基本的には商人の手によって自制的に形成されてくる。ヒックスはこれに続けて、それが要素市場、すなわち土地市場と労働市場の形成に進む場合、市場制度は比較的支配しにくい領域に浸透しつつあるか、あるいはそれを植民地化しつつある、とする。この領域においては、市場原理は適合しないか、適合しようとしても困難を伴う。そこに抗争が生ずることになる。この抗争はきわめて初期のころから始まり、我々の時代に至るまで続いているというふうに書いている。

私も、まさにヒックスが指摘するような意味で、市場経済がもつ力には限界があり、それが地域の個性のようなものにぶつかって、経済史の展開には地域ごとの地域性（個性とは言わないが）のようなものが見られるのではないかと考えている。

ところで現在、スタンフォード大学で、CIA（コンパラティブ・インスティテューショナル・アナリシス・プロジェクト、比較制度経済分析）という大学院のプログラムが始まっている。この首謀者は青木昌彦といい、実は京都大学経済研究所の教授をしていた人で、現在スタンフォードに移ったたいへんな数学者である。彼の下にアブナー・グライフという若い経済史の専門家がいる。この人は、11～12世紀のジェノバのキリスト教徒やマグレブのユダヤ教徒の交易取引における組織化の比較研究をしているが、ゲーム理論を使って、歴史の記述とゲーム論が一緒になった論文を書いている。

この中で、ジェノバの商人は、キリスト教徒であるという枠の中だけで、親族や血族の関係がなくても、相手が信用できる場合には遠隔地交易のエージェントとしてキリスト教徒を使っていたと述べられている。1回騙されると、エージェントを取り替えるわけだが、信用できるとなると、そういう非市場的な結びつきがない人間の間でエージェント関係という取引が連鎖して出てくる。ところが、マグレブのユダヤ商人はそういうことをしない。こちらは同じ血族で結びつく人物しか信用せず、その他の人はエージェント関係に入れない。こういうところにやはり、彼の言うところのカルチュラル・ビリーフ、社会の持っている価値観が影響し、資本主義のつくり出すネットワークのコアである商人間の仲間関係の形成も、文化によって、カルチュラル・ビリーフによって差異がある。そして「そうなるのは理屈がある」と、高等数学を使ったゲーム論のモデルが出てくるのである。こうした議論が始まっている。

その時に、ここはイスラームについて非常に興味ある点だが、商人は勝手に自己利益を追求するので搾取が出てくる。騙す。こうしたことに対して、公権力と商人がど

ういう関係にあるかによって、市場経済の形成、資本主義のネットワークの形成力、その浸透力に差が出てくるのではないかと思うのである。

実は、これは現代まで尾を引いている問題であるが、中国の国家と商人との関係、あるいはインドのカーストと商業との関係に関連しており、これらをめぐって今ある抽象的な思考をしている。これは全部ブローデルが実際書いていることなのだが、今回は時間がないので省くことにする。

さて、「市場の限界」とは、そういう商人がつくり出す経済である市場、ネットワークとしての市場にはやはり限界がある、ということである。土地や労働が関わってきた時にこの問題が出てくる。そこにやはり発展の地域性が出てくるのではないだろうか。

このことに関連して、人間関係、社会、文化の成立の根本には生態系の条件があるのではないか、という仮説をご紹介しておきたい。京都大学東南アジア研究センターの立本成文氏（現中京大学教授）は最近「社会文化生態力学」を提案されている。生態に規定されて、その上に社会と文化が乗っている。エコロジーまでも念頭に置かないと、社会の形がわからないのではないか。社会、文化の差にエコロジーあり、とこういう構図を提示されているのである。

5. 結：アジア経済の重層性

最後に、「アジア経済の重層性をみつける」。ここで「重層性」という言葉については、ぜひ後で議論していただきたいが、このシンポジウムの後藤明氏の報告では、一人の個が所属するサークルのようなものがいくつか多層的にある、といったことを重層性という言葉で言われたように思う。重層性について一つの定義を出されたと思うが、私はそれを踏まえながらも少し違う立場である。資本主義がつくり出すさまざまなネットワーク、それへの参入能力により、うまく多様なネットワークに参入できる大商人と、生態系により、たとえば山の中に住んでいるなどの理由で非常にネットワークへの参入能力が限られたグループ、そのような様々なタイプの経済主体がつくりあげる重層性、パーティカルな意味でのストラクチャーのようなものを重層性と捉えてみたい。私のイメージは、階層という言葉に近いかもしれない。

これに関連して、京都大学東南アジア研究センターの高谷好一氏（現滋賀県立大学教授）から、最近また『多文明世界の構図』[高谷 1997]という本をいただいた。その前には『新世界秩序を求めて』[高谷 1993]という、政治学の本かと思ったら生態学の著書があった。東南アジア研究センターの人たちが今何を主張しているのか、ご

紹介してみたいと思う。

このシンポジウムで松原正毅氏は、地域間比較の点から、実は海と砂漠は似ている、海と砂漠というのは通過路である、だから、そこには非常にネットワーク型の社会ができあがる、と述べられた。海の世界の代表は東南アジア海域世界である。これは通過型の社会でネットワーク型の社会だ。実は、海も含めて、中東イスラーム圏も、砂漠にオアシスがあって通過型の社会で、ネットワーク型社会だといえる。

一例を挙げると、アンソニー・リードは『サウス・イースト・アジア・イン・ジ・エイジ・オブ・コマース』[Reid 1988; 1993]という本を書き、14～17世紀の東南アジアは商業の時代にあったと主張している。この時代にいろいろな交易が行われ、その東南アジアの商業のもめごとを処理していたのは実はイスラーム法だったという記述、また証拠がいくつか出てくる。

ところが当時、信用手形としてフンディーと呼ばれる証書が使われていた。フンディーというのはヒンディーのなまったものである。これは実はチェティアと言われるインドの商業カーストがつくり出した手法である。また、度量衡については中国の度量衡が使われている。このような記述も出てくるのである。

つまり、東南アジア海域世界の商業の時代、広域間取引のネットワークでのめめごととの処理にはイスラーム法が使われていた。ただ、その信用の部分、どうもインド起源の商人がやり始めた手形のような仕組みが使われたらしい。中東イスラーム世界と東南アジア海域世界は似ているのではないか。それは、いずれも人がなかなか住みにくい海という生態、砂漠という生態に規定されているが、通過路として、道路としては便利なところだと。だからこういうネットワーク型の社会ができた、高谷氏は議論されている。

それに対し、ヒンドゥーの世界というのは全く違う世界を見せている。細かい点はお話ししないが、私が述べたように、資本主義のネットワークがつくられ、それに応じて地域社会、農村といったところがどのような経済発展の形を示していくか、その形態について重層性と述べたわけだが、その重層性のありようには生態にまで規定された、差異がどうもあるようである。

私の考える重層性、経済学者の考える重層性とは、後藤明氏が本シンポジウムで言われたことのディメンジョンを少し変え、商人間の仲間関係の形成、商人と権力との関係、あるいは商人が訪ねて行き接続をさせていく農民、生態の民との関係、こういった立体的にできあがる一つの全体の相互のつながり方のようなもの、そんなにはっきりしたものではないのでシステムという言葉は使いたくないが、そのようなイメー

ジのものである。

【付録 質疑応答のまとめ】

○原報告は地域研究に対する理論的なチャレンジであったと思う。非常に難しいが、ヒックスの著作『ア・セオリー・オブ・エコノミック・ヒストリー』を使い、新しいネットワークの市場論というものをもう一度地域研究でやってみるというのはチャレンジだと思う。最後に述べられた、重層性についてはいかがお考えか。

原 重層性についてはあらためて考えたいと思っている。

○差異・個性という問題と普遍性という問題の場合に、差異・個性、普遍性をつくり出すのはエコロジーだと見なしておられるのか、あるいは人と見なしておられるのか。両方があるように思えるが。たしかに自然観的なアイデンティティーからすれば、世界各地でエコロジーが異なっているのはその通りであるが、それを異なるものとして見ているのが人だとお考えなのか。それとも、それはもはや最初からエコロジーとかそういうもので異なっているものなのだとお考えなのか、おうかがいしたい。それと同時に、普遍性についてもおうかがいしたい。

原 普遍性、固有性というのは、本当に難しい。普遍と私が言っているのは、どこにでも入っていくようなもの、その程度に考えている。

固有とは何だということになると、これまた定義が難しい。私は京都大学東南アジア研究センターの科研プロジェクトで「地域発展の固有論理」というテーマの計画班の代表になってしまい、これを地域性とトーンダウンさせた次第である。

ただ、生態そのものが差異を生み出しているとは考えていない。生態とどのような関わりを持つか。ある意味では環境決定論だと言われても仕方がないが、そこに住む人々が、無意識的か意識的かは別にして、どれぐらい生態とのつながりを意識した社会生活をおくっているか、おくっていないか、ここに差が出てくると思っている。

どういうことかという、私はもともと農業経済で、農村調査をやった経験があるのである。ジャワの農村とタイのデルタの農村というのはまったく違う。最初はこの違いはやはり生態だと思った。ところが、その後生態に対してジャワの農民とタイの農民がどういう関わりを持っているかということのほうが重要であると考えはじめた。

簡単に言うと、タイのデルタの農民にとっては自然はまったくギブンである。つまり生態、あの大氾濫、大洪水に対して非常に受け身である。ところが、ジャワの農民は村の中である程度水のコントロールができる。村人が同じ生態条件を維持しなくてはいけないという意識を持っているのである。そうすると、かなり強い共同体のようなものが出てくる。要するに、あらゆる個々の人間は生態に錨をおろして生きているはずである。その錨がわりあい重い形でおりにジャワと、まったく錨をおろしてもおろしようがないタイの農民とは違うと、こんなふうに思っていた。

また、中東、砂漠の話を知ると、大きくは生態に規定された人間関係のつくり方というのがあるのではないと思う。ただ私としては、固有性や差異の問題はなるべく人間の社会関係のつくり方のレベルで考えたいと思っている。

○生態と人間の社会関係との関係が変わってくるのはどういう条件によるのか。

原 難しいところである。技術の問題でもあるし、人口という問題も出てくる。私はロングランにはテクノロジーと、人口かなと思っている。今も困っているのは、コンピューターのネットワークの時代になったらどうなるかという問題である。片倉もとこ氏が別の研究会で、21世紀は全

部イスラーム型ネットワークの世界になると言われたが、それはコンピューターのインターネットのことで、これは非常にイスラームの俗人的というか、生態から離陸したネットワーク社会にびったりしている。だから世界はイスラーム化すると片倉氏が言われたのを記憶しているのだが、そうすると、そういう形で技術も波及してくる。要は、技術と人口と考えているわけである。

○「起」「承」のほうはともかく、「転」から「結」に入るところで西アジアと他の地域とを語られたが、どのような背景からか。

原 4年間高谷好一先生とつきあっていたので高谷節になってしまい、高谷学説に影響されたせいかもしれない。

○「承」の部分では、メカニズム、機械としての市場論は、個々の人間が何か合理的に行動して、それで市場がメカニズム的になると言われたが、しかしこれは個々の人間が別に合理的でなくても、たとえば統計的に見て全体として合理的行動をすれば市場が合理的になるという考え方もできるように思われる。このあたりはもっと差異があるかないかということもたぶん経済学者は知っていると思うが。

原 細かい話になるが、こんなふうに考えていただいたら一番いいのではないか。つまり、神がこの世の中を非常に秩序あるものとしてつくったと思っていたわけである。アダム・スミスは「神の見えざる手が働く」と言った。ところが近代、アダム・スミス以降、神はいるのか、いやいないかもしれない、となってきた。「神の見えざる手」の「神」をなるべく学問の中から追放しようとするわけである。そこで、神のかわりに出てきたのがマーケットである。そのマーケットはどうモデル化されるかという、自動仕掛けの機械のようにモデル化されていった。

具体的に言うと、マルクスよりもワルラスのほうが典型的である。ワルラスは、市場には現実には存在しないオークショナーがいると仮定して議論を展開させている。オークショナーが値段を言う、売手と買手が「これだけ売りたい」、「その値段だったら私はこれだけ欲しい」となる。これを利潤最大化・効用極大化というのが、オークショナーが価格情報を出すと、こちらから数量情報が出てくる。それをオークショナーが調整する。その時の各個人というのは、オークショナーが言ってくれる値段に対して受け身に反応するだけである。そういう体系として市場論をつくりあげていったのが、このメカニズムとしての市場論である。

そういう仮定を設けておかないと、経済学では、数学的に安定条件を満たせない。これは連立方程式があって、その解が存在するかどうか、存在するとして、いったん均衡解から離れた場合に戻るかどうか、戻るのはこういう条件だ、と見ていく。こういう形でアメリカの市場経済学は発達した。今でもそれで来ている。

ところが、ネットワークとしての市場論では、まずオークショナーは存在しない。そんなものはどこにもいない。取引の組織者という概念がない。オークショナーというのは自分の利益で動く人間ではない。取引をするのは自分の利益で動くトレーダー、商人だということから始まっている。そして市場経済論の読み替えをやらうということだったのだが、その出だしがヒックスである。

実はそのヒックス自身ノーベル賞をもらっているが、それは前者の経済学を完成したということで授与されたものである。ヒックスは受賞講演で、「自分が今否定している研究にノーベル賞をもらって複雑な心境だ」と言っている。

やはり「神の見えざる手」があるという思想は今でもネオクラシカルの上の人々には残っている。ソ連の市場経済以降のコンサルタントをしたジェフリー・サックスはその典型例である。彼は、ソ連がおかしいのは自分が言ったことをソ連政府がやっていないからだ、自分の経済学は正しいと言い切っている。その経済学とは何かといえば、政府・官僚が統制をはずせば、「神の見えざる手」のようなマーケットは泉のごとく湧き出てくるということなのである。

ところが、ヒックスのような立場から行くと、そんなことはあり得ない、ということになってくる。そこで基本的な発想の差が経済学者の間にもある。経済学のほうに入りすぎて申し訳ない

が、ここでの私の議論はこういうことである。

○経済学の重層性というところで、例えば商人と権力との関係に言及されたが、これは経済学の議論という感じがするが。

原 私は、実はさっき言った広い意味での経済制度のまとまりのようなものを考えている。制度という中には法律も入れている。だから、広い意味でのエコノミック・インスティテューションのセットのようなものとして経済をとらえる。そのセットのことを重層性と言っているのである。後藤氏の言われた重層性を、そのセットの形として私は了解しているということである。

○現実には起こっている多様な経済行為ということをやはりよく見ておられないというか、見ておられるごくごく一部のところで議論が落とされているように感じる。

例えば東南アジアでは、フィリピンなどで特に多いが、非常にネガティブな経済行為といおうか、富むということはねたみを生むので、できるだけみんな富まないようにという社会的規範がはたらく。だから極端に言った場合、少し意味がずれてくるが、ボトラッチのように全部破壊してしまう。そこまでいかずとも、なるべく派手な格好はしない、なるべく人に見えるような儲けはしないという、そういう経済行為が人類社会の中にはかなり広くある。

西太平洋の航海者たちが言うところのクラ交易、あれは実際には交易でも何でもない。名誉の輪を回していくということだけである。だから、いわゆる利潤というものに基づいた経済行為の解釈というものは、やはりごく一面的な切り口ではないか。特に遊牧社会とつきあっていると、彼らには基本的に儲けるとか利潤を生むとか、そういうことがまったく欠落していると思うのである。

経済学に期待するのは、やはり多様な経済現象を丹念に押さえていってほしいということである。

原 おっしゃる通りで、ヴェスティッド・インタレスト、業界団体のようなものの内部規律というか、これが一番強いのが経済学だと思う。だから、おっしゃられたことは経済学者にはあまり期待できないだろう。特にアメリカの経済学がそうなっている。日本の学会の状況を見ても、何とかかなりそうもない。

一つは、たしかに今日の話でいうと、例えばメカニズムとしての市場論の系譜で教えようと思えば、教えられる。テキストがあって、こういう作法であればこういう答えが出てくる。この作法で書けば、はい、これPhD論文オクケーですと、こうなる。ところが、ネットワークの市場論で始めると、もうまったく村上泰亮さんだから書けると。彼が書くから人が読んでくれる。ほかの人物が書いてもだれも読んでくれない。そういう学問の制度化といおうか、その怖さが出ている。ただ一点だけ希望があるとしたら、トップでやってきた人々の中にこうしたことに気がつき始めている人がいることである。ただ、どれぐらい軌道修正できるかはわからない。

○ネットワークから市場ができるということで、高谷先生から影響され、海と砂漠とはネットワークの通路になるというお話だったが、たしかに東南アジア、それからイスラーム世界でもオアシス部分は非常に似ている。だいたい東南アジア研究センターなどの地域論は東南アジアだけを基礎にしてもものをおっしゃるので、生態系に偏ると思う。そもそも東南アジア世界というのが一つの文化世界として存在するとは思われないのだが。あれは基本的には3つの文字世界が交わるところで、近代になって帝国主義が囲い込んで初めて東南アジアという概念ができて、囲い込まれたほうも「そうだ」と言いだして、東南アジア概念ができる。それは根本的にイスラーム世界、中華世界と本質が違うと思う。

それに加えて、ネットワークができ、ネットワークのルールが形成されて、それはたぶん個々の商人の動きでできていくのだろうが、それが普遍化する時に、やはりここで公権力と商人の問題が出てくる。イスラーム世界と東南アジア世界が決定的に違うのは、公権力の基礎として巨大都市があるかどうかということである。その巨大都市を拠点にして重装備陸商国家のようなもの

ができて、バグダッドができてカイロができた。この点では、決定的に意味が違っており、経済だけでは経済メカニズムの形成は絶対解けないように思うが、お考えはいかがか。

原 まさに今説明された通りだろうと思い始めている。リードが言っていることがとても気に入っている。つまり、東南アジアの海域商業時代の商法、商取引のもめ事が起こった時のルールとしてはイスラーム法が使われていた。そこでイスラーム世界と東南アジア海域世界がネットワークとしては同じだという議論があるが、やはりたいへんな差があると思う。その意味をもっと考えてみたいと思っている。

たしかにリードもそのことには気がついていて、17世紀ぐらいになって東南アジアが危機の時代に入っていくと、アユタヤ王権はじめ東南アジアの王権は、領域支配型の普遍帝国になるのではなく、領域支配型のみみっちい絶対主義国家へと動いていってしまった。リードはそういう記述だけで終わってしまい、内容の分析はやっていない。たぶんある種の普遍法、世界のかなりいろいろなところまで及ぶアプリカブルなルールとか法というようなものを、東南アジアの海域世界はつくり上げられなかった。そこがやはり非常に違うのだと思う。それはなぜか、まだよくわからない。ただ、少なくとも東南アジア研究センターの人たちの地域論ではその点が欠落している。

○ネットワークの話をしたが、これはいつの時代のどこの地域なら適用が可能な議論として考えておられるのか、お話が非常に大きくて理解に苦しむというのが第一点。これは、ネットワークというものの概念を、どういうふうな形で、どこの時代に、どこの地域に設定できたかという問題である。

そして第二点は、市場について、資本主義の内容として今日お話しになったのは商業資本の問題で、近代資本主義の場合、産業資本の問題をどう考えるかがあるはずだが、それに関しては今日はほとんど言及されなかった。いつの時代かというのをお尋ねしたのはそういうことで、産業資本をそもそも念頭に置かない時代の話だからそれでいいという考え方もむろんあるとは思いますが。どうも今日のお話だけでは、商業資本の枠組がわからない。

それから第三の問題は、最後のあたりで出てきた環境、あるいはエコロジー、あるいは生態というような言葉で言われた点で、質疑応答の中でも人口の比率について言及されている。これはいわゆるアナールの論理フレームという話になるだろう。ところが、他方では環境が文化を決定し、文化が制度のセットを決めるという話だと、場合によっては非常に和辻哲郎的な風土論の世界になってしまう。そうすると、環境や生態を一つのキーワードとして挙げられた時に、どういふものを具体的にイメージされて、何がどういう形で関連しているのか。

原 これは三つとも重要な問題だが、まず二番目のほうから。時間の関係で産業資本主義についてまったく触れなかったが、私はヒックスを引用したりブローデルを引用して何を考えているかというと、まず資本主義の本質は商業資本主義にあると思っている。これはブローデルの言葉だが、産業資本主義はどこか他人の領域に属するものであると考えている。

一点だけ言っておくと、発展の地域性を考える場合にはここで産業資本主義論をやろうとしている。実はなぜ私がここをうまく言えていないかということ、私は日本の工場は知っているし、東南アジアの工場も知っている。どういう労務管理が行われてどうなっているかという、あるイメージはある。しかし、ほかの国で、たとえば私はインドも行っているが、ちゃんと工場を見たことがない。そうすると、産業資本主義の議論をするには、私は産業資本主義の基本は労務管理だと思っているので、この労務管理の比較研究というのがない。工業化のスタートが遅いからである。韓国は少し知っており、こういったところでの比較はできるが、まだここは私にとってはオブザベーションが少ないのである。産業資本主義論をアジアについてやるには、数字は山ほど知っているが、どれだけ工業化したかなどという部分がまだ私にはできていない点なので、落としてしまったということだ。

それから第一点に戻ると、ネットワークという言葉は私はあえて多義的に使っている。ネットワークとしての市場と言ったことと、それから「結」のあたりで東南アジアはネットワーク社会

だと言ったことは、本当に同じことを言っているのか、もうちょっとセマンティックスをきちっとやらなければいけないと思っている。が、やはりいずれにもある共通の部分がある。それは、私のイメージからは個と言っているが、個がある程度自発的に結び上がってつくり上げていく関係みたいなもの、ということにおいてである。たとえば、相手の側は無理やりやらされていることもあるかもしれないが、ある種の個がつなぎ手を出してつながっていくような、こういうイメージを見ているということである。

三番目の問題が一番難しいが、今ここでは答えられないと言ったほうが正確かもしれない。私は兵庫県の姫路出身で、和辻哲郎は大好きである。姫路出身だから和辻が好きだなどと変なことを言うが、郷土の人というのはなんとなく好きなものである。柳田国男はたくさん書きすぎてどうも…。いずれもよく読んできたので影響されていることは間違いない。だから、やや和辻的になっているのかもしれない。

ミクロな私のフィールド、よく知っているフィールドが東南アジアだが、実はここ2、3年来、一番頭が痛いのは、ハノイの黄河のデルタとメコンのデルタの農村について、ベトナム経済全体の研究の中で2つの地域の差をずいぶん感じていることで、やはりエコロジー、生態、風土ということが重要ではないかと思っている。だから、やはり和辻風に考えすぎている部分があるということは自分で告白しておいたほうがいだろう。

参考文献

岩井克人

1985 『ヴェニス商人の資本論』筑摩書房。

高谷好一

1993 『新世界秩序を求めて』（中公新書）中央公論新社。

1997 『多文明世界の構図』（中公新書）中央公論新社。

坪内良博

1993 「専門分野と地域研究」矢野暢編『講座現代の地域研究（1）地域研究の手法』弘文堂、49-69頁。

村上泰亮

1994 『反古典の政治経済学要綱』中央公論新社。

Braudel, Fernand

1979 *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XV-XVIII siècle*, Vols. 1-3, Paris: A. Colin.
邦訳：フェルナン・ブローデル、村上光彦・山本淳一訳『物質文明・経済・資本主義』3部6巻、みすず書房（1985-1999）。

Reid, Anthony

1988 *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680: The Lands Below the Winds*, New Haven: Yale Univ Press.

1993 *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680: Expansion and Crisis*, New Haven: Yale Univ Press.

邦訳：アンソニー・リード、平野秀秋訳『大航海時代の東南アジア1』法政大学出版会（1997）；『大航海時代の東南アジア1』（新装版）法政大学出版会（2002）；『大航海時代の東南アジア2』法政大学出版会（2002）。

Sir Hicks, John R.

1973 *A Theory of Economic History*, Oxford: Oxford Univ. Press.